

<前回>オリエンテーション

1. 近代の思想状況と自然神学
2. 自然神学の新しい動向
3. 形而上学批判と形而上学再構築

Exkur : 人文学の新しい可能性。科学技術の神学にむけて。

<前回>ハイデッガーと解釈学2

B. ハイデッガー・解釈学と科学

(1) ハイデッガーと解釈学

1. P・リクール「解釈学の課題」(『解釈の革新』白水社)

(2) キリスト教思想と解釈学

2. 小田垣雅也「解釈学的神学」(『知られざる神に——現代神学の展望と課題』創文社、1980年、150-171頁)

「解釈学的神学の意図の一つは、いわゆる神の言葉との出会いと聖書の批判的研究を橋渡しすることであるが、ブルトマンの矛盾を追及することで、その意図は果たされるだろう。又この作業の中で、解釈学的神学が基本的に、主観一客観構図を超えた神学であることも明らかになるであろう。」(150)

「理解そのものを検討する普遍的解釈学と、個々の文書の批判的検討、その解釈上の規則を扱う個別的解釈学の対立」(151)

「リクールによれば、解釈学の歴史には二回のコペルニクスの転回があったと言う。」(151)
ガダマーの「解釈学における「間」(das Zwischen)」

「理解とは、常にそれ自身で存在しているかの如く思われる諸地平の融合の過程のことである」、「理解とは、その本質において、一つの影響史上での過程なのである」(160)

「解釈学が位置すべき場所は、資料に対する解釈者の疎遠さ(Fremdheit)と親密さ(Vertrautheit)との「間」にある。」

(3) ガダマーと科学

3. ハンス=ゲオルク・ガダマー『科学の時代における理性』法政大学出版局。

Hans=Georg Gadamer, *Vernunft im Zeitalter der Wissenschaft*, Suhrkamp, 1976.

第一章 諸科学における哲学的なものと哲学の学問性について

「哲学は全体的なものに関わる」、「それは、全体的なものとして、すべての有限な認識可能性を越える理念」、「とはいえ、哲学の学問的性格について語ることも、やはり十分な意味がある」(1)

「言語を主題化することによって、全体的なものに向かう形而上学の古い問いにとって新しい基礎が提示されるように思われる」、「社会的存在者として最初からそのなかで生きている媒体であり、<われわれがすっかち溶け込んでいる全体的なもの>を開いてくれる媒体である」、「コミュニケーションが行われるところではどこであっても、単に言語が用いられるのではなく、言語が形成されるからである」(5)

「近代は」「ガリレイ」「デカルト」「<学問と方法に関する新しい概念(科学)>が登場」、「十七世紀以来」、「哲学は諸科学に対して正当化を必要とするようになった」(7)

「言語のうちに書き留められたわれわれの生活世界の了解は、科学の可能性によっては、完全にとって代わられることはできないからである」、「われわれが生きている世界を、言語とコミュニケーション的協同によって分節化すること」(14)

第六章 哲学か科学論か

「志向性の概念において、＜認識論の概念と認識論の理論的な構築物の根底に存していた、自己意識の内在性と世界概念の超越性との間の独断的な分裂＞が根本的に克服されたのである。現象学が意識の志向行能作のうち一切の客観的妥当性の構成が根拠づけられるものである以上、認識論は認識の現象学に、哲学は現象学に変化したのである。」(123)

「十七世紀」「学問の新たな理念(=科学)」(124)、「数学的構成に従属させ、こうして自然法則の新しい概念を獲得した」、「方法の理念」

「問題なのは、新しい(科学としての)学問理念と古いそれを排除するという関係ではなく、古いそれを新しいそれとの対決、それどころか、合一であった。これが、それ以後の、「哲学」の「本来の」課題になったのである」(125)

「デカルトにとって」「フッサールにとってすら」「＜こうした古い真理概念と、神によるこの概念の保証を背景にしてのみ、新しい学問(=科学)は根拠づけ可能になる＞」(126)

「ディルタイ」「世界観の数多性」(129)

「科学(=学問)が哲学に依存しないということは」「科学が責任を喪失したことを意味している」、「科学が＜人間の現存在の全体において、すなわち、特に自らを自然や社会に適用する際に、自分自身が何を意味しているのか＞という点について弁明することもできず、またその必要性も感じていないという意味でそうなのである。」(131)

「ところが、まさにここにおいて、現象学は「究極的に根拠づける」という自らの理想の限界に突き当たったのである」、「その際に、決定的な突破口になったのが、意識概念に対するハイデッガーの批判であり、そして、この概念が存在論的に先取りされていることの発見であった」(132)、「科学の客観性概念が、人間の現存在およびこの現存在が世界に差し向けられているということ」の派生的な様態として、存在論的に理解される」(133)

「ウィーン学団」「カール・ポパー」「トーマス・クーン」(134)

「ウィトゲンシュタインの自己批判と彼の言語ゲームという考え方」(135)

「言語が自らのコミュニケーション的仕事と果たしているところでは、言語は、自己了解の作用の技術、あるいは機関係として働くのではなく、この了解そのものであり、＜われわれが互いに理解し合える——それどころか、まさに同一の——言語を語っている共通の世界＞を建設するまでに進んでいく、了解そのものなのである」、「われわれ人間の生の言語的体制なのである。」(137)

(4) ヴァッティモと科学

4. ジャンニ・ヴァッティモ『哲学者の使命と責任』法政大学出版局、2011年。

1 哲学と科学

「ガダマー」「科学にたいして倫理的な限界を提示しているのである」、「科学の社会的・歴史的な効果の問題」、「この倫理性は精神の連続性、すなわちわたしたちはあるひとつの共通の状況に属しているという事実と関係がある」(12)

「形而上学にかんするハイデッガーの議論の意味するところをガダマーはほんとうには受け入れようとしていないこと」、「ガダマーがハイデッガーの形而上学批判を受け入れるのは、なによりも科学主義ないし科学客観主義にかんしてである。ハイデッガーのいう真の意味での＜存在＞の歴史といったものはガダマーの念頭にない。」(13)

「もしなんらかの純粋な相対主義に陥ってはならないとするなら、しかしまた他方、ヘーゲルから究極的絶対性の理念、すなわち完全な自己意識という理念を奪い去ってしまったなら、なにを代わりに置けばよいだろうか」(22)

「『どんなもの』は複数存在すると主張する者、すなわち、「なんでも可」というテーゼを主張する者には、他のテーゼを主張する者たちよりも多くの道理があるということなの

だ」(27)

「弱体化してきた存在の歴史」(28)

「哲学にも実験的な面があるとしても、それは「客観的な」認識をもたらすと想定されているようなタイプの実験性ではない」、「哲学にも経験的真理があるとわたしは確信している。けれども、その経験はすでに主観的・文化的に媒介されたものであって」「その自明性は大部分が文化からなっている」(35)

2 哲学、歴史、文学

「哲学において問題となる真理は複数の人間を相手にした説得の成果であるが、ハイデガーのいう〈存在〉の歴史への一定の信頼にもとづいている」(42-43)

「〈存在〉の歴史への信頼」、「それらがそのような古典に転化してしまったという事実はわたしをも渦中に巻き込んでいる。わたしという存在は大部分、古典が執拗に存続しているおかげで生まれたものなのだ」、「ガダマーが先入見の果たす積極的な意味での根源性を主張し、客観的精神の意義を強調しているのは、一理あることだった。わたしが結局ふたたびキリスト教信者になったのも、同じ理由による」、「歴史にはなにか神のようなものが存在する」(43)

「自分たちは神によって造られた存在であるという意識とでも呼んでよいもの」、「わたしたちは自分の力でこの世に存在しているわけではなく、他の者たちのおかげでこの世に生を享けている。そして、この事実こそわたしに遺贈された財産なのだ。この世で唯一わたしが手にしている大切な財産なのである」(44)

「科学的研究によって可能なものになった技術の使用にかんする問題は、ハイデガーがいつも言っているように、「技術の問題ではない」ということである」(56)

「わたしはハードな科学、実験科学の領域において起きることも存在の歴史なのだとみる観点のうちに自分を位置づける。そして存在の歴史にとって肝要なのは言語的メッセージ、文化的メッセージの伝達である」、「科学のほうが客観性の基準の変化のリズムが緩慢であるということが出来るにすぎない。科学の場合には、基準は長期にわたって緩やかに変化していく」

「自然科学とも精神科学とも異なったりまったく別のなものかでありながら、しかもその両者のうちに含まれている。「ハードな」科学といえども解釈的な学だからである。解釈的な知であって、たんなる記述的な知ではないのだ」、「客観性自体も〈存在〉の歴史のうちに位置しており、〈存在〉の歴史に所属しているにすぎない」(58)

3 哲学における論理

「形式的な厳密科学の領域も〈存在〉の歴史に巻き込まれているという事実」(65)

「哲学は日々の言語活動、自然的な言語活動によって構成される言説なのだ」(67)

「ハイデガーが注釈している聖パウロの書簡で語られているパルーシア[救世主の来臨]の問題に似ている。メシアは現実には到来しないかもしれないが、メシアが到来するだろうという約束と期待が、メシアにすでに出会ったという最初のペテン師の言葉を信じこまなようにさせているのである。〈存在〉の歴史もこれに似ている」、「必然性として提示される教義論的なテーゼを軽率に信用してはならないと教える一連の出来事の推移、それが〈存在〉の歴史なのだ」(78)

「ハイデガーが〈存在〉の歴史について語るとき、彼が言わんとしているのは、あるメッセージがわたしに呼びかけているということである」(80)

「〈存在〉の声はどこからやってくるのか」、「その強制力はどこにあるのか」、「わたしがみずからに同化し承認している過去に生きられた伝統、そして現在も言語活動のなかで生き延びつづけている伝統から、わたしのもとにやってくるのである」(81)

3. 形而上学批判と形而上学再構築

3-2: ホワイトヘッドとプロセス神学

1. ホワイトヘッド哲学へのアプローチ

Alfred North Whitehead, 1861-1947 :

Science and the Modern World, 1925

Religion in the Making, 1926

Process and Reality. An Essay in cosmology, 1929 (1969)

Adventures of Ideas, 1933

A Free Press Paperback

< **Process and Reality** >

Part I: The Speculative Scheme

I: Speculative Philosophy

II: The Categoreal Scheme

III: Some Derivative Notions

Part II: Discussions and Applications

Part III: The Theory of Prehension

Part IV: The Theory of Extension

Part V: Final Interpretation : I: The Ideal Opposites II: God and the World

< 基本命題 >

① Speculative Philosophy is the endeavour to frame a coherent, logical, necessary system of general ideas in terms of which every element of our experience can be interpreted. (5)

② The true method of discovery is like the flight of an aeroplane. It starts from the ground of particular observation; it makes a flight in the thin air of imaginative generalization; and it again lands for renewed observation rendered acute by rational interpretation. The reason for the success of this method of imaginative rationalization is that, when the method of difference fails, factors which are constantly present may yet be observed under the influence of imaginative thought.

(7)

< 形而上学の方法＝一般化の方法 >

数学基礎論から科学哲学、そして形而上学へ（自然学→形而上学）

『数学原理』、『自然認識の諸原理』『自然という概念』『相対性原理』

(1) より高次の一般性へ（終わりなき前進とそのつどの定式化の試み）

経験の事実によって前提とされる一般的観念、自明性を越える

形而上学的志向性（全体へ、宗教と科学）

(2) 数学との対比、抽象化の問題（二つの誤謬）

(3) 一般化と経験への適応（検証）：合理主義と経験主義の統合

(4) 枠組みの構築と想像力、訓練された本能

(5) 知の体系性

2. ホワイトヘッドの形而上学の枠組み

① 現代科学の实在理解とその一般化

② 一切の实在は相互作用連関の内にある

actual entity (the final real thing) / the 'principle of relativity'

キリス思想の新しい展開——自然・環境・経済・聖書（1）——

③現実的存在の構造：現実態は両極的である

環境に限定される → 作用因、機械論的 → 自然的極
 自らを形成する → 目的因、目的論的 → 精神的極
 二つの極の総合＝合生(concrescence)

④現実的存在の時間構造：時空的連続体としての現実的存在

過去（環境的過去）・自然的抱握／未来（主体的目的）・概念的抱握（新しさの創造）／
 現在・合生

⑤現実的実在はプロセスである（自己創造を通じた世界創造）

- ・自己創造的プロセス・有機的プロセス（合成 concrescence）＝世界の形成過程への寄与
 創造性(Creativity)、神、永遠的客体(eternal objects)
- ・生成から存在へ：現実的存在の三重の性格
 1. 過去の世界によって与えられたという性格
 抱握(prehension)：客体に関心(concern)を持つこと、感取(feeling)
 2. 因果的に限定されながら、ある目的観念を未来において実現するという性格
 合生過程：自己原因的、主体
 満足(satisfaction)：主体的目的に実現
 3. 後続する現実的存在に対して自らを客体的存在として与える
 自らを超え出て自らを他者に与える：surperject（自己超越体）
 因果的に客体化される、存在となる
 1. 3：他との連関・連帯、2：個としての自由・自己原因

⑥感取と決断

⑦主体的目的(the subjective aim)：強制力として作用するのではなく、促し・誘因となる

山本誠作『ホワイトヘッドの宗教哲学』行路社、1977年。

「アクチュアル・エンティティ」「環境的世界によって限定されながら、自らを限定してゆくところの「自らを創造する被造物」「機械論的な因果関係によって支配されながら、自らを限定し、「新しさ」(novelty)を創造してゆく、「世界を構成する最小の有機体」「生命の領域と無生物のそれとを分かち二元論を拒否して、一元論的立場をとる」(21)

「近世以降、科学と宗教との乖離」、「思惟するもの」としての精神的実体と、「延長をもったもの」としての物体とを、はっきり二分するデカルトの立場、「延長を本質とする物体観は、目的論的自然観とははっきり訣別する」(22)

「宗教は科学とは無縁の、人間の生命に関わる魂内部の問題と考えられてきたのである」(23)

「科学から導き出された諸観念は想像力を通して、それらがそこから由来する限られた領域を越え出て、すべての事物に適用できるように一般化されるのである」、「哲学と科学との相互交流」「同様のことは科学と宗教との関係についても」(24)

「科学が主題とする対象は、窮極因にしたがっての自己創造性の度合が、比較的低い諸現実態であり、逆に宗教が意識的に問題にされるのは、本能を越え出て、知性とかが知恵が働いてくるような、高次の諸現実態においてである、とはいえるであろう。しかし本来宗教はそのような領域にのみ限局することは、正しい考え方ではないであろう」

「そのつど、神は働いている」、「アクチュアル・エンティティが限定されつつ自らを限定してゆくとするれば」(25)、「自然法則」「の有り様も、神の働きと決して無縁のものとは考えられないのである」(26)

3. ホワイトヘッドと宗教

(1) 宇宙論的構図 (目的論的な世界の創造過程)

自然科学から一般化→形而上学

この枠組み内に、宗教はいかに位置づけられるのか

創造性／神／永遠的客体／外延的連続体

目的因／作用因／形相因／質料因、プラトン『ティマイオス』における「神」

(2) 神の本性の三重性

1. 神も一つの現実的存在である

In the first place, God is not to be treated as an exception to all metaphysical principle, involved to save their collapse. He is their chief exemplification. (405)

2. 神の本性の三つのアспект (一つの現実的存在としての全体的な神の、相互に独立で相関した仕方)：原初的本性、結果的本性、自己超越的本性

原初的本性：概念的抱握

結果的本性：自然的抱握

三重の本性：神は世界に依存し、世界から独立であり、世界に働きかける

①原初的本性 (「神から世界へ」 1 - 働きかけ・誘因)

3. 永遠的諸客体とそれを現実化する現実的存在との関係性

永遠的客体と外延的連続体から時空的連続体・現実的存在の社会の形成という観点での神の役割、形相によって質料を限定し、現実の世界を構築する

4. 永遠的諸客体の相互の関連性

神による永遠的諸客体の非時間的評価が、時間的世界の経過に先立って非派生的になされる

5. 最初の主体的目的を供給、説得的誘因 (persuasive lure)

現実的存在の合生過程を導いてゆくのが、神の原初の本性から直接導き出される主体的目的、理想的な完全性の実現への衝動

6. 外延的連続体の諸現実的存在による原子化が、時空的連続体に結果する。

外延的連続体の原子化、選択的制限は神の決断にもとづく

②結果的本性 (「世界から神へ」)

展開する宇宙の諸現実的存在の神による自然的抱握

神の本性は世界の創造的前進の結果としてある。

神による世界の自然的抱握は選択的 (= 神の記憶) であり、あるものは消極的抱握を通して神から排除される (= 神の審判)

③自己超越的本性 (「神から世界へ」 2 - 世界への内在)

神が自らを後続する現実的存在に与件として与えること

ホワイトヘッドの神の特徴

↓

(3) 神と世界の逆対応

神と世界の逆対応ともいうべき力動的な関係

神に関しては原初の本性が優先、他の現実的存在の場合は過去によって与えられたという性格から出発

神は能動から受動へ、世界は受動から能動へ展開する

(4) 万有在神論 (ハーツホーン)

キリス思想の新しい展開——自然・環境・経済・聖書（1）——

・神は永遠的恒常的であるとともに時間的流転的、世界超越的であるとともに世界内在的、世界に含まれるとともに世界を含む、人格的存在者である

It is as true to say that God is permanent and the World fluent, as that the World is permanent and God is fluent.

It is as true to say that God is one and the World many, as that the World is one and God many.

It is as true to say that the World is immanent in God, as that God is immanent in the World.

It is as true to say that God transcends the World, as that the World transcends God.

It is as true to say that God creates the World, as that the World creates God. (410)

・「神は三重の性格の三一的統一者として、世界を、人間をも含めてすべての事物の経験を通して、否、それらとの共同において、作ってゆく人格的全体者なのである」

「神が万物との共同において作ってゆくこの世界においては、それを構成する個々のものは、それぞれがそれ自身でありながら、否、そうあることによってこそ、全体に寄与貢献しているのである」、「個と全体との調和的關係」（山本、210）

4. プロセス神学とキリスト教思想

(1) ホワイトヘッドの神論（まとめ） → キリスト教と自然科学、キリスト教と仏教

・神の本性の三重性：cf. 無からの創造、三位一体、人格性

・神と世界の逆対応：cf. 予定と自由意志

・万有在神論：cf. 超越と内在、有神論と汎神論

神は永遠的恒常的であるとともに時間的流転的、世界超越的であるとともに世界内在的、世界に含まれるとともに世界を含む、人格的存在者である

(2) キリスト教思想にとっての意義—プロセス神学—

・プロセス神学：ホワイトヘッド形而上学の概念枠によるキリスト教思想の構築

Charles Hartshorne(1897-2000)／John B. Cobb, David Ray Griffin, Lewis Ford

① ホワイトヘッドの神 → 宗教の神へ

② 「科学と宗教」 → 新しい有神論の定式化

・環境論的意義

A forest is the triumph of the organisation of mutually dependent species.

Every organism requires an environment of friends, partly to shield it from violent changes, and partly to supply it with its wants. The Gospel of Force is incompatible with a social life. By force, I mean antagonism in its most general sense.

Almost equally dangerous is the Gospel of Uniformity. The differences between the nations and races of mankind are required to preserve the conditions under which higher development is possible. (Whitehead, 1925, 206-207)

(3) プロセス神学と比較級の神

・ Charles Hartshorne, *A Natural Theology for Our Time*, Open Court 1967

(Ch.ハーツホーン『自然神学の可能性』行路社。)

これまでの講義で確認したように、ポストモダンの形而上学批判は、キリスト教的な強い神について、その再考を要求している。以上の考察より明らかになった。では、それはあらゆる意味での形而上学の放棄を意味するのであろうか。もちろん、これについては、

形而上学をどう理解するかによって様々な答えが可能である。ここでは、形而上学批判以降の思想状況における形而上学再考の試みと神概念の構築について、プロセス神学の議論を紹介することにしたい。

プロセス神学は、ホワイトヘッドのプロセス哲学によるキリスト教神学の再構築の試みであり、それによって、古代ギリシャの形而上学の概念枠に規定された古典的なキリスト教神学を乗り越えようとするものである。そこに見られるのは、完全で自己完結的な神ではなく、人間および世界と相互に媒介し合いながら宇宙の創造過程を前進させる神、つまり、世界の諸存在からの影響を受けつつも（受苦可能）、宇宙を真理・美・平和の実現に向けて説得的に導く神なのである。

ハーツホーンは、アンセルムスが『プロスロギオン』で神の存在論証のために提出した神概念、つまり、「これ以上大きなものが考えられない或もの」(aliquid quo maius cogitari non potest)をもとにして、「どうしても凌駕され得るとは考えられない存在」(the not conceivably surpassable being)という神概念を用いることによって、次のように論じている。

〈自分自身によって凌駕されうる〉ということから〈他のものによって凌駕されうる〉ことは推論できない。その上さらに、我々の全体性という観念は、〈自己凌駕〉(self-surpassing)が〈他のものによる凌駕不可能性〉とどのように結びつけられるかを明らかにする。(Charles Hartshorne, *A Natural Theology for Our Time*, Open Court 1967, p.20.)

ハーツホーンが試みているのは、「これ以上大きなものが考えられないこと」＝「他のものによる凌駕不可能性」＝「自己凌駕性」(自分自身による凌駕可能性)という議論である。プロセス神学が求める神は、自らを越えてゆく神であり、その自己凌駕の過程で神も宇宙もより大きな真理と美の実現に向けて進展してゆく。これは、人間やそれ以外の被造物全般に自らとの共働を認めつつ、創造性の前進のためにたゆまず働く神である。この神は、最高存在・最高価値として完全性を完成させた神 (completeness、perfection)、つまり、最上級の神ではなく、それに比べれば、力の弱い神と言わねばならない——ハーツホーンが弱き神という表現を認めるかは別にして——。しかし、プロセス神学の主張によれば、この神こそが、預言者からキリストへ辿られる聖書の弱き神を表現するに相応しいものなのであって、しかも、単に弱いだけでなく、世界の全存在と共に苦しみ喜びつつ、最終的には宇宙の創造過程をより大きな真理と美と平和に導くのである。まさに、比較級の神と言うべきであろう

<参考文献>

1. 山本誠作『ホワイトヘッドの宗教哲学』行路社。
2. 田中裕『ホワイトヘッド 有機体の哲学』講談社。
3. 栗林輝夫『現代神学の最前線』新教出版社。
4. 宮平望『現代アメリカ神学思想 平和・人権・環境の理念』新教出版社。
5. John B. Cobb, Jr. and David Ray Griffin, *Process Theology. An Introductory Exposition*, Westminster John Knox Press, 1976.
6. John B. Cobb Jr., *Process Theology as Political Theology*, Manchester University Press / The Westminster Press, 1982.
7. David Ray Griffin, *Religion and Scientific Naturalism. Overcoming the Conflicts*, State University of New York Press, 2000.